

私語のない授業

— 一つの事例報告 —

小林 純

「こんなに静かだなんて大学らしくない授業だ」と、カメラマンが驚いた。いろいろな大学のプロモーションビデオを作成している彼を驚かせたのは、七百人近い学生が私語もなく熱心に講義に耳を傾けているタッカーホールの光景である。付言すると、撮影があったから私語がなかったのではない。それが常態化していることこそ、真に驚嘆すべきことなのである。

私語のない授業、大教室担当の教員には夢のような姿が、しかも教室でもない大講堂で現実となっているのである。どれほどの苦労があったかを本当に想像できるのは、大教室の経験者だけであろう。カリキュラム改善、シラバス作成等の苦心がむくわれるか否かは、ひとえに授業の運営そのものがうまくゆくかにかかっている。諸々の会議の議論ではどうしても抜けてしまうこの現場の具体的な問題を考える手がかりとして、ここでは事例報告の形で材料を提供したい。併せて、全学共通カリキュラム運営センターの学部選出委員の立場にある者として、日頃思うところを付言しておいた。御用とお急ぎの方には、末尾の「資料」だけでも

お目通しいただきたい。

山口義行氏の経験

ここで紹介するのは、立教大学経済学部で「金融論」を担当する山口義行氏の事例である。履修者約950人のうち、出席者は毎回500～700人にもなるという。高出席率を維持し、私語のない状態を常態化するまでには並々ならぬ苦労があったはず。本人にその苦労話をうかがった。

山口氏の場合、前任校での経験が生かされている。彼が大学の専任教員として初めて赴任したのは短期大学であった。授業に対する短大生の意識は高校の延長と違ってよく、「出るのがあたりまえ」であって、出席率は極めて高い。だが同時に全員が真剣に講義を聴くつもりでないことも確かである。したがって私語は多く、授業中はいつもザワザワしていたという。彼は、希望に燃えて就いた職が「聞く気のない学生たちに向かって、一方的に90分間喋り続けること」なのかと愕然とした。仕事のためとはいえ90分間天井に向かって話し続けている教師たちを見て、「俺はこんな一生は絶対にはイヤだ」と

思った——ここに大学教員山口氏の原点がある。

ここから彼の戦い、「一生学生の愚痴を言いながら生きてゆく、くだらない教師」になりたくない山口氏の真剣勝負、が始まった。この戦いの日々は、新人教員の試行錯誤の典型例ともいえるものである。彼ははじめに、「聞く気のない学生は出ていきなさい。やる気のある学生だけが残ればよい」と、権力行使による解決を試みた。教室から約半数が出ていった。そのことを先輩教師に話したら、「そんなはずはない」と怪訝そうな顔をした。そしてこう続けた。「半分も学生が残るはずがない」。ちなみに山口氏はこの権力行使策を「完全な失敗」と総括している。半数に帰られては失敗だ、と彼は考えた。

出席させて、しかも私語をなくすこと——ここに目標をおいた努力が様々なに試みられた。プリントを配ったり、ビデオを見せたり、学生の笑いを呼ぶ「ギャグ」を用意したりなどなど、いろんな試みを行った結果、彼の授業は、数カ月後には見事に「私語のない授業」になった。出席者数150人程度の必修科目であったから、この授業の後、彼女たちはそのまま教室移動して他の必修科目を受講したが、そこでは相変わらず私語を絶やさず、教師の愚痴を誘っていたという。

「学生がうるさくて困る」という愚痴はどこかの大学でも聞かれるが、そう愚痴る教師のどれだけが本気で私語解消

の努力をしたのだろうか。山口氏はこう苦言を呈する。私語がうるさいと愚痴を言うことは、「私は教師としての能力が不足しています」と表明しているに等しいのに、そういう愚痴を恥ずかしそうに、反省を込めて声に出している教師をほとんど見たことがない、と。

現在、この山口氏の「金融論」は経済学部学生の間で一つの神話になりつつある。講義開始時に、学生の教師への激励であろうか、教壇の机の上に缶ジュースが何本も置かれたこともあった。夏休み明け、一年生に今後何を勉強したいかと尋ねると、「3年になったら山口先生の金融論をとりたい」とこたえる者がいた——これは私自身の体験。金融論の山口ゼミの学生が、ゼミ発表会の準備のために、ハンバーガーショップで明け方まで議論していた。大講堂で大人数の学生を相手に、からだじゅう汗いっぱいになって講義する山口氏の努力は、今、むくわれている。努力は学生に伝わっている。学生はしっかりと見ているのである。

少人数なら私語はない

山口氏は半数の学生が帰ってしまったことを「完全な失敗」と考えた。だが一般的には「半分も残るはずがない」と言っただんの教師の感じ方が多数派であろうし、残った学生を相手に講義すれば「私語のない授業」がやれる。やる気のある学生だけなら私語はない。それは、これまた一般的には、

少人数の授業となろう。山口氏とは対極的な私の事例を（恥ずかしながら）もとに言えば、「少人数なら私語はない」のである。

私の担当科目は「社会思想史」、3・4年中心の選択必修扱いの科目である。思想史に興味のない者、クラブや就職活動で充分に出席できない者には、始めから「来なくて結構である——当然、単位は取れないはず」の姿勢を示す。例年3桁の履修者のうち、出席者はせいぜい3～40名。居眠りは放任する。少人数だから、時には学生たちに質問したりする。ほとんどは聞く気で来る学生だ。私語に悩むことなどありえないのである。試験前には見慣れぬ顔で60名位になると、私語する学生もでる。「聞いている人もいるんだ」と言えば、すぐにおとなしくなる。試験では答案枚数が百枚程、単位取得者は例年50名前後である。

1年生の基礎演習（30名弱）や専門の演習でも私語などない。私に次々と当てられるし、また参加型授業だから、学生にも私語するつもりすらない（はず）である。演習形式で教員・学生の顔が対面で向き合うとき、どんな学生だって（一応は）真剣に聞こうとする。小人数の講義ならば、出席者全員とこの「一対一」関係を疑似的に構築できよう。数が多いと、これは至難の技となる。

私にも、非常勤先で、また新任教師の頃、大教室での体験がある。4月の様子見の数回、150名ほどの見物客が

あった。とっておきのネタを大サービスで提供し、ともかくも聞かせる苦勞をしたが、一瞬たりとも気が抜けない。抜けば私語が始まる。板書のときでも背中にもものすごい圧力を感じてしまう。そんな汗びっしょりの90分だったことは覚えている。こちらの要求水準を少々上げ、また成績評価の厳しさが学生間に伝わると、その後の履修者は減り、結局、私語に悩まされるということからは解放された。

授業の全部を小人数にして、必修科目をなくせば、間違いなく私語はなくなる。だがカリキュラム上、また私立大学の（あるいは学部の、か？）事情からして、それは不可能である。私のような教員は、学部内では「ぜいたく」であると批判される。私本人は、「うらやましがられている」と勝手に受けとっているのではあるが。本学部では、履修者が五百名ならやや多めとされ、千名を超えることもまれではない。そんな大講義は今後もなくなりはず、山口氏のような精力的な教員を、「制度」が要求し続ける。誰かの、個人的な努力が、制度的に要求される。

全学的な会議でなにか新たな試みが決定されそうになると、私が出席しているなら、私は「反対」を唱えることが多い。全学会議における学部エゴイズムの表れと受け止められているらしい。新たな試みは、必ずいつも「良いこと」なのだ。その「良いこと」に反対する人物とされかねないのではあるが、私にも言い分はある。大学の資

源は有限である。大教室という制度的な困難には目もくれずに、あるいは封をしたままで、別のところに資源を振り向けようというのが、先の「良いこと」推進の構図であるならば、その推進派こそ、学生・教員比率で相対的優位に立つ学部のエゴイズムでなくてなんであろうか……と、声高に叫ぶつもりもないが、制度的な、構造化された困難を放っておいていいものだろうか。学部内で一人だけ「ぜいたく」を享受している私の立場も、そんなに心地よいものではない。ただし、私語のない教室の教壇に立てるのはうれしいことであり、「ぜいたく」なことだとも思っていない。

大学の教師が教えること

学生に私語をさせずに講義を聞いてもらう——どう話すか、に関わる問題は以上でひとまず終え、次に何を話すかについて触れたい。

本学では97年度より、現行の一般教育課程にかえて、全学共通カリキュラム（略称全カリ）が展開されることとなった。それは言語教育科目と総合教育科目の二本立てとなっている。これまで3系列と呼ばれてきた領域も再編されて総合A群となり、さらに分野横断的な、複数教員での運用も可能な総合B群なるものも新設されることになった。狭い専門性にとらわれずに学生が主体的に問題発見的学習ができるように、また既成の学問的区分けにかかわりなく現出する諸問題に多面的に接

近できるように、と、様々な意匠が考案されつつある。学ぶことの楽しさを体験してもらおう、そのためには1年生に対しても、現実への多面的な切り口を提示しよう。総合科目の設計に際しては、およそこんなことが旗じるしになっているようだ。たしかに、どれも、もっともなご意見だとは思いますが、実現できれば、今より良くなるような気はする。

しかし、である。学生は何を知ろうとしているのか。社会的ニーズの議論はいまおくとしても、例えば経済学部生についてさえも、「日本経済や世界経済の動きについては無関心で、それに関する本はおろか、新聞や雑誌もよまない大学生でも、会社のランクや資本金についての知識だけは異常に発達している」というような辛口評が見事に当たっている。彼らは、まさしく会社本位社会で役に立つ知識を、教えなくとも覚えようとしている。

多面的な切り口の提示にしたところで、大学教員よりはテレビ・タレントのほうがはるかに演出たっぷりとうまくやってくれる。そして同じ役に立つ知識なら、テレビ・タレントから授かったほうが御利益も高そうだ。彼らと競う気にもなれない。ヴェーバーの有名な講演「職業としての学問」には、教壇の禁欲が説かれる直前に面白い一節がある。今から80年も前のことだ。「彼ら [アメリカの青年たち] は教師をこう考えている。この男は俺に彼の知識や方法を俺の親父の金と交換に売

っているのだ。ちょうど野菜売りの女がおふくろにキャベツを売るように、と。そしてそれ以上は別に考えない。もちろんこの場合の教師が例えばフットボールの名手なら、彼は彼らにとってその方面での指導者であろう。だが、彼がそうではなく、また一般にスポーツ方面での優れた人物でないならば、彼はどこまでも一介の教師であって、それ以外の何者でもない。だからアメリカの青年たちは、彼から「世界観」だとか彼らの生活の基準となるべき規則だとかを売ってもらえることができるなどとは、夢にも思っていないだろう。²⁾ このフットボールの名手を「テレビ・タレントに置き換えれば、そっくりそのまま、われわれの日々接する日本の学生のイメージが得られるだろう」。実用的な知、商品化した知、タレント的な知が重宝がられている。³⁾

山口義行氏には、同僚の小西一雄氏との共著『ポスト不況の日本経済』（講談社現代新書）があり、それが書籍部で平積みされているから、一部の学生には知名度はあろう。しかし「タレント」にはほど遠く、また名前で講義はできない。何と言っても彼は金融論の専門家であり、扱う対象を自家薬籠中のものとしているからこそ、講義に工夫がこらせるのである。多方面での講演活動をこなす山口氏であるから、経済時評よろしく連続講演会形式でも年間の講義はもたせられよう。しかし現象面の知識を多くすることが大学の

講義の全目標ではありえない。金融現象に対する「ものの見方、考え方」が大切なのだ。インフレーション一つきちんと理解するだけでも、「流通必要貨幣量」なる考え方が必要になってくる。専門家なればこそ、多様な現象を整理し、それを原理的なものに関係づけ、常識の虚を突く議論が展開できる。

私の言いたいのは簡単なことだ。教員は自己の専門の素材を扱ってこそ講義に精力をそそぎ込める。ヴェーバーの引用から浮かんでくるのは、専門家としての大学教員という像である。そしてこの原点を忘れては、いかなる改革も失敗する。教養教育と専門教育の関係が云々されているが、教養は教育できるものでもなさそうだし、ましてや大学教員にそれができるとは思えない。ディシプリンに徹してこそ（のみ？）力を発揮する人々に、力を発揮できる場をいかに用意できるか、改革の成否はここにかかっていると思うのだが、いかがであろうか。

最後に重ねてもう一つ、「古典が読まれなくなった」と嘆かれて、もう久しい。長い長い時間の風雪に耐えてきた「古典」を読むことの大切さは、繰り返し説かれている。⁴⁾ ただそのことの意味が、学生にはストレートに伝わりにくくなっている状況も、承知しておかねばなるまい。教師は古典を読むことの意味を具体的に伝えねばならない——とはいえあまり具体的ではない効用の方が大きいと思える。そこで、大学教員なればこそできるディシプリ

ン=たたき込み(規律)のしんどさと面白さとの教示が、疑似「古典講読」の役を果たしてくれはしまいか、と考えてみた。「トンデモ本」の読者の中には大学生も多いというご時勢には、是非とも必要なことだと思われる。具体的に形から入らなくてもよいのだが、例えば時系列データ収集を自分で行った学生なら、世間のあやしげな論調を自分の頭で批判できるようになる。現象面の多面的知識をもって行う論評(学生にそれができただけでもほめてやりたい!)よりも高次の知的活動ではないだろうか。そしてもし教養教育というのであれば、大学教員が手助けできるのは、まさしくこうした「専門教育を通しての教養教育」という形になるのではあるまいか。

- 1) 奥村宏『法人資本主義』1991, 朝日新聞社, 32ページ。
- 2) マックス・ヴェーバー『職業としての学問』岩波文庫, 58ページ。
- 3) 以上, 雀部幸隆『知と意味の位相』1993, 恒星社厚生閣, 29ページ。
- 4) 「……「古典」を失った人間, あるいは社会にとって, 知性は衰弱の危険にさらされているともいえる。「形」を拡大したり, 変形したりするためには, まず「形」そのものがなければならぬからである。」猪木武徳「理性偏重で枯れる知性」, 月刊『論座』1996-2, 朝日新聞社, 27ページ。

(経済学部 助教授)

[資料]

(ここで紹介した山口義行氏に、「私語のない授業」を実践するためには教員がいかなる姿勢でのぞむべきかについて、詳細なメモを作成していただいた。それを資料として掲げる。山口氏には、ご多忙中にもかかわらず、ご協力いただいたことに心より感謝申し上げる。……小林記)

現在、私がこれこそ「私語のない授業」のために必要な教師の心掛けであると考えていることを記しておく。

①メリハリをつける——ガラガラと一本調子の講義をしない。

ガラガラとした一本調子の講義を90分間もじっと聞いているというのは実に苦痛である。そんな時に、学生がついつい私語をしてしまうのを責めることなど誰もできない。内容的にも、また口調においてもメリハリをつけることが必要である。場合によっては、「ここが大事だからノートしなさい」とか、「これは今日の講義のキーワードだよ」とか「いよいよ今日の講義のクラスマックスなんだが」といったことを実際に口にして、学生が「ここは聞いておかなければ」という気持ちになるような仕掛けをすることも必要である。

②「参加」を促す——教師が一人で一方的に喋って帰っていただくだけの授業にしない。

数百人もの学生が出席している大規模講義なのだから止むを得ないことだ

が、学生たちは寝転がってテレビでも見ているかのような気分で教師の話を聞いている。「自分も授業に一構成員として参加しているのだ」などという意識はほとんどない。私語はそこから始まる。

そのため、私はいろいろな手段で学生たちが参加意識をもつように務めている。たとえば、授業中突然クイズを出す。「金融を引き締めようとするとき、日銀は手形売買市場で手形を買う操作を行うのか、それとも売る操作を行うのか。『買う』と思う人は右手、『売る』と思う人は左手を挙げて！」といった具合である。重要なのは、必ず全員の手が挙がっているのを確認すること。一度でも一部の学生しか手を挙げていないのを知りながら授業を進めたら、これはほとんど効果がないだけでなく、逆効果になる。「自分が参加しなくても授業はすすんでいくのだ」ということを学生に自覚させるだけの結果になってしまうからである。(最初は、学生が嫌がるのではないかと恐る恐るはじめたのだが、これは意外に評判がよく、クイズをもっと増やして下さいという意見をわざわざ私に進言する学生も現れた)。

あるいは出席カードを配って——タッカーでの授業になってからはさすがに人数が多すぎて実施困難だが——、その裏に今日の講義の感想や疑問を書いてもらい、回収する。ここでも重要なことがある。それは学生たちの感想や疑問を何らかの形で次の授業に反映

させること。たとえば、「先週カードに書いてもらった質問の中にこういうのがあったが……」といった形で授業を進めたり、「先週の講義は分かりにくかったという意見が多かったので、今日はまず少し復習をすることにします」といったことを講義の冒頭で言う。こうしたことを繰り返していると、学生は自分の質問や意見で講義の進め方に変化が起きうることを確認し、その参加意識は高まる。出席カードに「今日は何を書こうか」などと考えながら学生は講義を聞くようになる。私語は少なくなり、私語する学生を「邪魔な奴らだ」と感じる学生が増える。

③常に1対1のつもりで——学生を「集団」として扱わない。

授業運営のヘタな教師の典型は「おい、その辺うるさいぞ！」といった注意の仕方をする教師であろう。「その辺」の中には、多くの「うるさい学生」に紛れてはいるが、真面目に講義を受けようとしている学生も少しはいる。後者は教師と同様「うるさい学生」の被害者である。ところが、教師はそういう個々の学生の違いを忘れてついつい一塊に学生を扱って注意してしまう。真面目に講義を受けようとしていた学生は「なんで俺まで叱られなきゃいけないんだ」と憤慨し、結局「うるさい学生」に仲間入りすることになる。私は、「この列の後ろから三番目の青いシャツを着た学生、うるさいぞ！」といった注意の仕方をするよう心掛けている。何百人の講義であっ

ても、学生と教師は常に「1対1の関係」にあるべきだと考えているからである。

600人も出席していると、「ここまでのところ、皆さん理解できましたか」と講義をストップして学生たちに尋ねてみても、ほとんど反応がない。誰もまさか自分に尋ねているんだなどとは思わないからである。「こうして尋ねているんだから、反応してくれよ」と言って待っていると、必ず何人かの学生が頷くか、首を横に振るなどの反応を示してくれる。そういうことを何回か繰り返していると、そうした学生は徐々に「600対1」ではなく、「1対1」で私と向かい合っている意識になる。その証拠にキャンパスで出会うとよく挨拶をしてくれる。彼らだって、「あんな大教室の授業じゃ、自分の顔を先生が覚えているはずがない」と頭ではわかっているのだが、それでも会釈してくれる学生が少なくないのである。それは、彼らが「1対1」の関係で私の講義を聞いていてくれるからだろう。そういう学生を一人でも増やすこと、少なくともそういうことを常に心掛けることが「私語のない授業」を実現するためには必要なのだと思う。

④「出席甲斐」を実感させる——自分の講義を聞くことの意義を具体的に伝える。

満員電車でゆられて大学に来て、90分間もじっと黙って教師の話の聞くというのは、学生だから当たり前だといえればその通りだが、やはりかなりのエ

ネルギーが必要なことは否定できない。したがって、「それだけのエネルギーを使って出席するだけの甲斐がある授業を提供してほしい」と常に学生は求めており、しかもその「出席甲斐」を各回の講義に求めている。これに対し、我々は学者としては「学問は体系だから、その講義の意義は年間の講義全体を通してはじめて理解するものであって、それは一回一回の講義でその都度実感できるというものではそもそもない」と言いたくなる。

教師の役割はこの矛盾をどう埋めてやるかということにある。それがどの程度うまく出来るかということが、出席率が高くかつ「私語のない授業」を実現できるかどうかということに深く関わっているように思う。

学生の「出席甲斐」を各回の講義でどう実感させるか——平たくいえば「出て得をした」という「感じ」をどのようにして学生にもたせるか——ということに大学教師はもっと配慮をすべきではないか。経済科目であれば、たとえば、本来ならもっと先の講義でとりあげるべき事柄を先取りしてでも——つまり、学問的体系を多少犠牲にしてでも——、学生たちが目にしたり耳にしたりする経済事象と講義で取り上げた理論的な問題がどう関連しているかを説明したり、科学的に事柄をとらえることとマスコミ等で一般に流されている論調を鵜呑みにすることとがいかに関連するかを繰り返し強調することなどが必要である。

⑤「講義は入り口」と位置づける——
「教える」ことより「問題関心」を
呼び起こすことに重点を置く。

「おもしろい授業」とは学生の問題関心を引き出す授業である。学生の勉学にとって講義は所詮「入り口」でしかない。講義によって呼び起こされた問題関心に従って本や新聞を読んだり、他人と議論したり、あるいは資料や論文にあたったりすることで学生ははじめて勉学を実践することになる。そういう意味では、「おもしろくない授業」は「閉じられた入り口」であり、学生の勉学の道を閉ざすものであって、これほど有害なものはない。講義を「おもしろく」するための努力をすること自体が学生への迎合であり、「けしからんことだ」などと考えている大学教授はこのこと（自分が加害者であること）をもっと認識すべきではないかと思う。

ある1年の男子学生が、前期最後の

金融論の講義で提出してくれた「授業の感想」のなかに、こう記していた。「『円高』についての講義が一番おもしろかった。基礎演習の時間で円高問題について報告したことがあったが、言いたいことがクラスの皆にうまく伝わらず、どうしてだろうと思っていたが、この講義で自分の理解が充分でなかったことに気付いた。金融論をとっているクラスの仲間10人ぐらいで、勉強会をつくることにしました。」——私が今年1番うれしかった感想文である。

「現在の大学は所詮レジャーランド。勉強しようと思って大学に入ってくる学生などいない。この感想文もどうせ先生へのおべっかだろう。」と思う教師が居ても構わない。ただ、そう思うことで講義を「おもしろく」するための努力をしない自分を無罪放免してしまうことだけはやめてほしいと思う。

山口義行（経済学部 助教授）